



20歳を迎え、大人として新たなスタート地点に立った皆さん、目標や夢に向かって元気に歩いていってください。

成人式の実行委員として力を注いでくれた4人の皆さんに、今の思いを語っていただきました。



No.280

## 成人式を終えて

### 成人式実行委員会



#### ■井上 仁志 (委員長)

私は、今回、実行委員長を務めさせていただきました。実行委員のメンバーと役場の方々の力添えもあり、無事に成人式を終えることが出来ました。

今回の成人式で、ご来賓の方から「どんな形でもよいので、両親に感謝してください。」と仰っていただきました。私たちは一人で成人になったわけではありません。両親や、先生方、地域の方々など、多くの方々に支えられてここまで成長することが出来ました。いままでもかかわってくれた人、一人一人に感謝しようと改めて感じました。

いままでもに受けた「愛」を、「恩」で返せるように、更に成長していきたいです。

#### ■江藤 美沙希

活動が始まったのは、昨年の八月でした。先輩に誘われ、昨年の成人式のお手伝いをさせていただき、今度は自分たちの番だと張り切っていました。自分たちの成人式を盛り上げたいという気持ちはありましたが、忙しさもあり、実行委員ではサポート役として活動してきたつもりです。

成人式当日は、久々に中学生生活を共に過ごした友人達に会うことができました。変わらずまたこうして語り合えたことが本当に嬉しかったです。また、これから社会人になるにあたって不安な気持ちもありましたが、みんなそれぞれの道で努力していることを知り、私も負けてられないと改めて思いました。素晴らしい式にさせていただきました。ありがとうございます。



←茶話会の冊子

私たちと人権シリーズ No.117

## 幸せの黄色い旗

田布施西小学校 校長

田中 恵美子

今から二十年前、実家の近くの小学校に転勤となりました。両親は、毎日、娘が家の前を通ることになって大層喜びました。「お寿司を作ったから寄るかと思っただのに。」  
 と言ってくるのですが、子育て真っ最中で、しかも多忙な教師が、帰宅途中に寄り道する余裕などほとんどありません。携帯電話も持たない時でしたので、「寄ってほしい時は、旗でも立ててくれれば寄るけど…」  
 と何気なく話したところ、しばらくして、実家の門に、黄色い旗が立ちました。本当に作っただと、思いながら、立ち寄ってみると、総菜を持って帰られるように作ってありました。

井上 仁志 小野 功貴  
 米津 晃人 四反田真衣  
 江藤美沙希 島崎 祥子  
 吉村 明紘 野村 拓哉  
 竹内理咲子 久保みのり  
 中川 碧惟 浜岡 大地  
 吉村 享子 青田 諒子



成人式実行委員のみなさん

### ■小野 功貴

目を閉じれば、日が暮れるまで部活動に励んでいたあの光景が想い出され、あの頃に戻って想い出をつむぎ合うことが出来ました。

「青春の夢に忠実であれ」と言ったドイツの詩人がいます。私達の中には、既に実社会入りして働いている者もいれば、学業を継続中の者もいます。置かれた状況の違いはあれ、常に夢を信じ、夢に向かって努力していきたいです。

生まれてから二十年、これまで何らかの形でたくさんの人に支えられて、生きてきましたが、これからは、次の世代を支える側になれるよう社会に貢献していきたいです。



### ■久保 みのり

実行委員として成人式の運営に携わらせていただき、同じ実行委員のメンバーや田布施町役場職員の皆様をはじめとする地域の方々に支えられて成人式が開催できたということを実感しました。今回の成人式開催に向けてご尽力いただいた皆様に、この機会をお借りして御礼申し上げます。実行委員として私自身ができたことは本当に微々たるものですが、運営する側に携われたことで今後につながる経験が出来たと思います。

また、新成人として、成人式という形で成人のお祝いをしていただけたことを嬉しく思います。まだまだ精神的に未熟な部分が多いのですが、成人したという自覚を持ち、これからさらに成長していくよう努力していきます。

それから、たびたび、黄色い旗が立つようになりました。「昨日は、出張だったのに旗が出ていたよ。代わりに寄ろうかと思っただ。」

と、職場でも話題になってしまいました。冬場になると、暗くて旗が見えないかもしれないと、旗の前に父が立っていたこともありました。

忙しくしている私を少しでも助けてやりたいと思う親心がありがたく、慌ただしい中にも幸せな日々でした。勤務していた八年間で黄色い旗はすっかり色あせてしまいましたがお陰で、子どもたちは無事、巣立ち、私も仕事を続けることができました。

数年して父が亡くなり、母も車いす生活となり施設でお世話になっていきます。お見舞いを持っていった蜜柑を「今年のはおいしいね。」と言って食べている母の姿を見ながら、今度は私が、「幸せの黄色い旗」を立てる番が来たと感じています。

親子、家族のあり方は様々ですが、互いに思いやる心を次の世代につないでいくよう、今、自分のできることを精一杯していきたいと思っています。